

保育学生が認識する保育士の専門性 (1) — テキストマイニングによる頻出表現分析 —

高尾 淳子

Research of the Understanding of Specialties of Child Care Workers in Nursery Schools
Training of the Early Childhood Education Department Students (1)
— Word Frequency Analysis by Text Mining —

Takako Atsuko

1. 問題意識

愛知江南短期大学現代幼児学科では、実践力のある保育士・幼稚園教諭の養成を目的としてカリキュラムを編成している。このため本学科の学生は、1年次前期の時点ではほぼ全員が保育所・幼稚園・児童福祉施設等における保育者としての就職を希望している^(注1)。本短期大学では、2年間ないし3年間^(注2)の期間にて、保育現場で求められる専門知識を学生に提供している。そして就職後には、学生が就職先にて諸先輩から指導を受けつつ実践を積み重ね、保育のプロフェッショナルへと育てていただくことになる。したがって本短期大学の役割としては専門知識の伝授に加え、保育現場でその専門知識を基礎に保育者としての専門性を高め、研鑽し続ける心構えを備えた新人保育者を輩出することが求められる。

保育学生が短期大学から就職先への滑らかな移行を実現した場合には、当該学生にとっては新人保育者として、就職先で定着することが新たな課題となる。この課題に向かうには、新人保育者の職場への適応力が必要となる。しかしながら、本学の卒業生に限らず、就職後数日あるいは数ヶ月で離職する新人保育者がおり、年度開始時期もしくは年度途中の保育現場に混乱を生じさせているとの問題が、複数の幼稚園長へのインタビューにより明らかになった^(注3)。就職後数日の離職については言うに及ばず、年度途中における保育者の離職は、保育・教育現場に対して多大な迷惑をかける結果につながる。クラス担任保育者の突然の離職は、職場職員への迷惑のみならず、当該園等に所属する子どもたちの心を傷つけ、彼/女らに甚大な不利益をもたらすことになる。

このような新人保育者の年度途中の離職や、職場への不適応を未然に防止するには、学生在学中に、大学が就職支援の一環として「学生と職場とのマッチング」を実施することが必要である。これに向けては、①複数の保育所・幼稚園等の見学や、②保育施設等でのボランティア

体験・アルバイト等を通して、「個々の施設の特徴・重視する保育内容等」と「個々の学生のパーソナリティ・得意分野等」とのマッチングを行い、準備を進めることが望ましい。筆者は学生の就職支援を担当する中で、就職に向けた準備として卒業年次の学生には特に①を、1年次の学生には特に②を促してきた。しかしながら、早期から目標を設定し準備を進めてきた学生については就職が早期に内定する一方で、卒業年次の9月の時点で職場見学訪問を躊躇する学生もいる。後者の学生群は、必ずしも学業成績が芳しくない者ばかりではない。

それでは、就職活動を先延ばしにする学生の行動には、どのような理由があるのか。これを解明するにあたり手がかりとしたのは、個別相談の場における学生たちの言葉である。一人ひとりの学生と面談する中で、学生たちの意識がそれぞれ異なるという現象がみられたことから、それらを整理し、学生たちの意識を仮説的に大きく3つに類型化した。具体的には、自己肯定感が低く自信をもつことができない学生群（第1群）と、就職に対して楽観的思考をもつ学生群（第2群）、そして1年次から着実に希望就職先の情報収集をし、準備を進めている学生群（第3群）である。本研究で問題とするのは、第1群ならびに第2群の学生である。

幼稚園・保育所等の職場見学に向向くと、生きいきと活躍する保育者の姿や、各園等の多様な教育内容を観察することが可能となる。幼稚園・保育所等には、園児数やそれにとまなう職員数、教育内容や保育形態、周辺環境などについてさまざまな特徴がある。それゆえに本学科では、職員採用試験受験にあたり、事前の職場見学を進めている。しかしながら、前述第1群の学生には、自らの保育実習・教育実習園の特徴のみが当該学生に強烈にインプットされ、それらの臨場感に圧倒されて自身の職場不適應を危惧する者が含まれる。一方第2群の学生には、「急いで就職活動をせずとも、おそらく就職は可能」といった意識を有する学生等が含まれる。

このように、個々の学生のパーソナリティによって就職活動を先延ばしにする理由はさまざまであるが、それらの理由の内容にかかわらず、就職に向けた準備の開始の遅れは就職先の選択肢の減少につながる。したがって学生の将来の利益を追求するならば、学生を早期から就職活動に向かわせることが得策となるが、本学科ではこの部分に課題がある。本課題解決に向けては、1年次より学生に保育者の専門性を意識させ、2年間（3年間）の限られた期間で意欲をもって保育職にかかわる専門的知識を修得させることにより、卒業年次の前期^(注2)には就職活動に対する学生の心の準備を整えさせることが本学科の喫緊課題となる。

2. 研究目的

本研究は、短期大学の保育学生に1年次より保育者の専門性を意識させ、2年間（3年間）の限られた期間で意欲をもって保育職にかかわる専門的知識を修得させること、ならびに保育現場でその専門的知識を基礎に保育者としての専門性を高め、研鑽し続ける心構えをもたせることを目的に、保育者養成機関における授業での教育内容を検討することを目的とする。

3. 研究方法と分析の視点

●研究方法

第1に、保育者の専門性ならびにその教育内容について先行研究を整理する。第2に、保育学生に「保育者の専門性」の修得ならびに将来の研鑽継続意欲をもたせることに向けて、保育実習を終了した卒業年次の学生が捉えている「保育者の専門性」について調査する。第3に、第2の調査結果を分析（テキストマイニングによる頻出表現分析）し、保育学生に向けた今後の専門教育の内容を検討する。

●分析の視点

第2で求めた調査結果から得られた情報を、下記の3視点から分析することを通して、「保育学生の専門性認識の実態」と「保育者養成校の教育内容」との間に生じている差異を明らかにし、養成校の教育内容について検討する。

分析の視点（1）立場に関する表現

分析の視点（2）保育士の子どもへの関わり方に関する表現

分析の視点（3）子どもの姿・活動内容に関する表現

4. 先行研究

関口（2001）は、保育者の専門性について「知的技術的専門性から感性的専門性への展開をいかに埋めるか」との問題提起をした⁽¹⁾。それはたとえば、専門的知識や基本的生活習慣等の指導力に代表される知的技術的専門性はもとより、眼前の子どもの変化に気づいたり、場面や状況に応じて次の行動を判断したりする感性的専門性をどのようにして修得させるのか、という課題である。前者については、机上の学問として養成機関の講義や、文献にて学ぶことが可能である。一方後者については、保育現場にて実際に子どもたちの中に身をおく、あるいは保育現場に近い臨場感のある場面を設定し、シミュレーションをする等の機会が必要となろう。そのような機会がなければ、個々に人格をもって生きている人間を相手にする「保育」の遂行は、難しいものとなる。

また海口（2007）は、「子育て」がかつては日常のごく一般的な人々の生活に組みこまれていたために、保育者にもあえて専門的な知識を社会が求めることはなかったという歴史を踏まえて、「保育者は専門職たりえるか」との問題意識を述べている⁽²⁾。この前提のもとで海口は保育者の専門性について検討し、「これまでに培った保育の知識や技術を有効に活用して、いかに臨機応変に対応できるかが保育者に求められる重要な専門性」としているが、2007年時点では保育者は未だ専門職たりえないとする一方で、むしろ熟達者あるいは熟練者と呼ぶのが適切であろうとしている。

一方、香曾我部（2011）は、保育者の専門性に関する研究動向を①「保育者の本質」、②「現代社会が保育者に求める専門性」、③「保育者集団の中で求められる専門性」、④「保育者個人に求められる専門性」の4つに整理した。この中で②「現代社会に求められる専門性」と

して、子育て支援、多文化共生、特別支援・児童福祉施設との連携を挙げている。また④「保育者個人に求められる専門性」としては、保育課程・保育内容の理解、指導法の修得、子ども理解の深化について専門性が示されてきた方向性を述べた⁽³⁾。

平成 21 (2009) 年 4 月 1 日から適用の保育所保育指針には、保育士について「保育に関する専門性を有する職員」との記載がある (第 1 章 2 (2))。この「保育に関する専門性」については、第 1 章 (総則) で次のように規定されている。

保育所における保育士は、児童福祉法第 18 条の 4 の規定を踏まえ、保育所の役割及び機能が適切に発揮されるように、倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって、子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものである (第 1 章 2 (4))。

これに従い、新保育所保育指針が求める保育者の専門性を整理するならば、【1】子どもの状況や発達過程を踏まえて養護及び教育を行う能力、【2】専門的知識、技術及び判断力、【3】保護者に向けた指導力等が柱として挙げられる。

保護者との連携の必要性については、平成 12 (2000) 年度から適用の旧保育所保育指針においても謳われている。これに加えて新保育所保育指針ではさらにもう一步、保育士が保護者の願いや育児不安に歩み寄ることを求めている。保育所の第一義的役割は、入所児の最善の利益を考慮し発達支援をおこなうことであるが、入所児が一日の半分以上の時間帯を家庭で過ごすことや、個々の家庭内の一部で生じているネグレクト等の児童虐待の実態を鑑みれば、保護者に向けた援助・保育に関する指導の必要性が社会の要請により増大したものと考えられる。これらのことから、「保育者の専門性」とは時代に即した概括的な概念であるといえよう。それは社会の変化や、それともなう家庭環境・養育環境の変化を経て抽出された課題により、内容が質量ともに少しずつ変化していくものである。したがって、「保育者の専門性」については定期的に捉えなおしていくことが重要である。

5. 調査結果

平成 23 年 6 月に保育実習を経験した大学生 68 名を対象に、「実習先で、保育のプロフェッショナルだと感じた現職保育士の姿」について質問紙調査を実施した。結果、対象学生全員から自由記述形式にて回答を得た。ここで得られた保育学生のテキストから、頻出表現を出現回数の多い順に 96 抽出した。つづいてそれらの頻出表現から類似した意味をもつものとして使用されている表現を集め、50 種にまとめた上で出現頻度の高い順に並べ、表 1 に示した。次に、表 1 に示した頻出表現 50 種を、立場に関する表現 (クラス 1)、保育士の子どもへの関わり方に関する表現 (クラス 2)、子どもの姿・活動内容に関する表現 (クラス 3) の 3 種にクラスタリングし、表 2 に示した。

〈表1〉保育学生68名のテキストに含まれる頻出語

抽出語	出現数
子ども・子ども同士・園児・乳児・年長	236
保育士・先生	105
説明・声・言葉・伝え・言う・注意・呼び	100
遊び・遊ぶ	42
思う・考える・判断	41
目を配る・見る	41
私・自分・実習生	38
食べる・給食・おかし	29
泣・怒	27
意見・発言・話を聞く	37
玩具・おもちゃ	25
手を	24
けんか・取り合い・取る・玩具	21
楽し	19
一緒に・全員	17
様子・行動	17
興味・やる気・引き出す	15
部屋・入る	14
出来る	14
活動	13
指導・教える・見せる	13
働きかけ・援助	12
受け止め・理解	11
気づく・感じる	10
気持ち	10
優しく・優しい	10
行く	9
座る	9
寝る・午睡	9
友だち・お互い	9
落ち着く・納得	9
使う	8
場面・状況	8
分かるよう	8
良い	8
クラス	7
解決	7
厳しい・叱る	7
信頼・関係	7
洗う	7
行う	6
時間	6
静か	6
保育	6
抱き	6
理由	6
トイレ	5
対応	5
落ちる・けが	5
外	4
障害	4

〈表2〉保育学生68名のテキストに含まれる頻出語
(3分類)

クラス1：立場に関する表現

クラス2：保育士の子どもへの関わり方に関する表現

クラス3：子どもの姿・活動内容に関する表現

クラス	抽出語	出現数
1	子ども・子ども同士・園児・乳児・年長	236
	保育士・先生	105
	私・自分・実習生	38
2	説明・声かけ・言葉かけ・伝え・言う・注意・呼び	100
	意見・発言・話・理由を聞く	43
	思う・考える・判断	41
	目を配る・見る	41
	手を	24
	楽し	19
	一緒に・全員で	17
	興味・やる気・引き出す	15
	指導・教える・見せる	13
	働きかけ・援助	12
	受け止め・理解	11
	気づく・感じる	10
	優しく・優しい	10
	分かるよう	8
	良い	8
	厳しい・叱る	7
	信頼・関係	7
洗う	7	
保育	6	
抱き	6	
対応	5	
3	遊び・遊ぶ	42
	食べる・給食・おかし	29
	泣・怒	27
	玩具・おもちゃ	25
	けんか・取り合い・取る	21
	様子・行動	17
	できる	14
	部屋・入る	14
	活動	13
	気持ち	10
	行く	9
	座る	9
	寝る・午睡	9
	友だち・お互い	9
	落ち着く・納得	9
	使う	8
	場面・状況	8
クラス	7	
解決	7	
行う	6	
時間	6	
静か	6	
トイレ	5	
落ちる・けが	5	
外	4	
障害	4	

●データ分析 (1) 立場に関する表現から

立場に関する表現 (クラス1) では、高頻度順に「子どもを意味する表現」が236回、「保育士を意味する表現」が105回、「実習生を意味する表現」が38回出現した。主な文章構成は、「こどもが〇〇したときに、実習生が××したが円滑に進まなかった。しかし、保育士が△△したら子どもは…へと変化した」というものであった。このデータは、実習生がそれまでの大学内での学びを保育現場で十分に活用することができずに困惑し、現職保育士から学ぼうとしている姿勢を示唆する。

●データ分析 (2) 保育士の子どもへの関わり方に関する表現

保育士の子どもへの関わり方に関する表現 (クラス2) では、高頻度順に「言葉かけ」が100回 (第1位)、「聞く」が43回 (第2位)、「見る」が41回 (第3位)、「判断」が41回 (第3位) 出現した。このデータから、「保育士の子どもへの関わり方」について本調査対象の実習生が最も関心をもって観察していたのは、保育士と子どもとの言葉のやりとりであったことが明らかになった。その言語的コミュニケーションの中では、特に保育士が発する言葉について「優しい」(10回) や「厳しい」(7回) との表現が使用されている。このことから学生たちは、保育士が子どもに向けて発する言葉そのものだけでなく、語調や、言葉を投げかける際の表情にも注目していることが読み取れる。またそれに加えて、このたびの実習中の子どもとのやり取りの中で、特に実習生にとって困難となる場面の一つが、子どもに注意をするときであったものと考えられる。

また、第3位の「見る」については、保育士が「自分の周囲にいる子どものみならず、遠い場所にいる子どもの姿や様子にも目を配る」、あるいは保育士が「子どもの変化を見る」といった形態にて発現した。これは、実習生が眼前の子どもの対応のみに集中し、広い範囲を見渡すことができずにいる課題をもったことを示す。実習生は、このような現時点での自己の限界に気づいた上で、広範囲の子どもを見て対応している保育士の姿に専門性を見出している。

「見る」と同頻度にて出現した「判断」については、実習生が保育現場にて判断にせまられる場面の多さを知ったことにより、保育士が状況に応じて判断し行動している姿を見て、それを専門性と捉えたものと考えられる。

●データ分析 (3) 子どもの姿・活動内容に関する表現

子どもの姿・活動内容に関する表現 (クラス3) では、高頻度順に「遊び」が42回 (第1位)、「食」が29回 (第2位)、「泣・怒」が27回 (第3位) 出現した。このデータからは、実習生が実習先でもっとも関心を持ち、主体的に観察し、子どもとかわっていた場面が「遊び」「給食・おやつ」「トラブル・子どもの不機嫌」であることを示唆する。実習生が主体的にかかわっている事象であるからこそ課題意識が生じ、保育士の姿を注意深く観察し、記憶にとどめているのである。実習生は、保育士の遊びの指導や給食指導、けんかへの対応、子どもの

あやし方や気持ちの立てなおさせ方に、専門性を見出している。

実習中に遭遇する場面は数多い。今回実習生たちが注目した「遊び・食・トラブル」の他にも、実習生に注目してもらいたい場面がある。その中のひとつが、特別な配慮を必要とする子どもに向けた保育場面である。調査対象の68名の実習生は、それぞれ異なる保育所で実習している。平成14年の文部科学省調査結果報告（知的発達に遅れはないものの、学習面あるいは行動面に著しい困難を示す児童生徒が、通常学級に6.3%の割合で在籍している）をふまえると、就学前の子どもたちが利用する各保育所には、特別な配慮を必要とする子どもや、気になる子どもが在籍しているものと考えられる。各保育所では、これらの子どもの特徴に即した発達支援をいかに進めていくかについて、試行錯誤を重ねているところである。しかしながら、68名の実習生のテキストにおいては、「障害」という表現が4回使用されているにとどまる。このデータは、本調査対象の実習生たちの関心が、障害児保育に関して高いとは言えないことを示す。さらには、その関心の低さが起因となり、保育士の子どもへの関与に注意を向けて観察しようとする視線に乏しいことが示唆される。

6. 保育者養成機関における今後の課題

実習生が子どもとのやり取りの中で滑らかなコミュニケーションをとることができずに困惑し、保育士から懸命に学びとろうとしたのが「子どもに注意をするときの言葉かけ」であった。このように、学生自身が必要に迫られて学ぼうとする意欲が、学生の学修効果を高める要因となる。したがって保育者養成機関でも、現場を意識した教育内容をこれまで以上に導入する必要がある。それは単に、「子どもの行動Aに対して、〇〇と注意をする」などというマニュアル的な指導の導入を意味するものではない。子どもには、個々人にさまざまな特徴がある上に、健康状態や体質についても個別の事情がある。さらには、家庭環境も個々に異なる。保育士の言葉かけは、これらの子どもの諸事情を踏まえた上で、言葉を選択し投げかける配慮が必要となる。

保育のプロフェッショナルが発する言葉の背景には、基盤となる知識と経験がある。各場面にて状況判断をした上で、抽出され表出するのが職業人としての保育士の言葉である。しかし、実習生が主に認識しているのは、表面化している保育士の言葉の具体的な一例としての文言である。したがって、保育実習で偶然遭遇した一場面にて保育士の言葉の一端を耳にし、それを模倣したとしても、その汎用性はさほど期待できない。それならば、自らの知識と知見を基盤に眼前の子どもの実態を観察し、効果的な対応策を判断し実践する力を学生に修得させるために、養成校がすべきことは何か。

本調査から得られたデータにより、対象実習生たちの障害児保育に関する関心の低さが示唆された。各保育所には、小児保健や障害に関して特別な配慮を必要とする子どもたちが在籍するにもかかわらず、「けが」の使用が5回、「障害」の使用は4回である。さらには「アレルギー」や「アトピー」等、保育士が子どもに特別な配慮を行っているであろうはずの病名等に

ついでに発見回数は、0である。それはすなわち、学生自身が必要に迫られていないために当該分野について学ぼうとしていない状態になっており、そのことが学生の学修効果を低下させる要因となっている。この部分で対象実習生たちは保育者養成校に対し、一つの課題を提供している。

大学生である保育実習生に保育経験が不足しているのは当然であり、直ちに経験を蓄積するのは困難である。しかしながら、在学中に保育経験を繰り返しつつ、そこから課題を発見し、それらの課題を大学に持ちよって学びあい、その成果を保育の場にて還元するというサイクルを通じて、クラス全体の学修意欲を促進していくことは可能である。したがって今後、学生の在学中には専門知識の修得に加え、自ら考えて判断し行動に移す演習をさらに重視する必要がある。

今後は本調査結果を大学1年生に還元し、1年次より学生に保育者の専門性を意識させる働きかけを進めた上で、保育実習に向かわせるよう進めていく予定である。そして、2年間という限られた期間で意欲をもって保育職に関する専門的知識を修得させ、第1群（自己肯定感が低く自信をもつことができない学生群）ならびに第2群（就職に対して楽観的思考をもつ学生群）の学生たちにも、就職活動に対する心の準備を早期から整えさせるよう進めていく。なお今後の研究結果については、稿を改めて報告する。

注1) 平成23年5月に、現代幼児学科1年生を対象に個人面談を実施した結果、ほぼ全員の学生が幼稚園・保育所・施設等への就職を希望していることが明らかになった。

注2) 長期履修コース所属の学生は、3年間の学修年限の中で幼稚園教諭2種免許と保育士資格を取得する。

注3) 平成23年5月、「愛知県私立幼稚園連盟と保育者養成校との懇談会」にて幼稚園教諭の（年度途中の）早期離職について議論がなされた。その後、筆者が同連盟所属園の複数の園長より、個別の事例をお聞きした。また、平成23年9月に筆者が実習園訪問指導を実施した際、訪問先の園長より事例をお聞きした。

注4) 愛知県下では、愛知県私立幼稚園連盟ならびに愛知県私立保育園連盟と保育者養成機関との申し合わせにより、保育職の採用試験が9月1日以降に実施される私立園等が多い。

参考文献

- (1) 関口はつ江「保育者の専門性と保育者養成（総説）」『保育者研究』第39巻第1号，pp.8-11，日本保育学会，2001.
- (2) 海口浩芳「保育者養成における専門性確保の問題：保育者は「専門職」たりえるか」北陸学院短期大学紀要39，pp.35-44，北陸学院短期大学，2007.
- (3) 香曾我部琢「保育者の専門性を捉えるパラダイムシフトがもたらした問題」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』59(2)，pp.53-68，2011.